

12月是人権月間です。

毎年12月10日は「人権デー」で、12月4日から10日までが「人権週間」です。

第71回 人権週間 令和元年12月4日(水)～10日(火)



たかさき人権プラザ 「第71回人権週間記念・ふれあい人権展」

作文の部 **奨励賞** 受賞作品



一般人という言葉を知っているだろう。辞書で調べると「特別の身分や地位を持たない人」と書いてあった。

突然だが、私は耳に障がいをもっている。小学校二年生の時に滲出性中耳炎になり、そこから聴力が低下、一時期は聴力が八十デシベルの重度難聴の状態になってしまったこともある。しかし現在は多少回復していて、四十デシベルほどである。私は毎日、障がい者という特別な人ではなく一般人として生活しているつもりだ。毎日学校へ行き、部活動をするしテストも受ける。そんな毎日のなかで思うのは、「この世の中は障がい者に対して厳しい」ということだ。

教育を例に考えてみよう。メガネをしている人はクラスに何人もいるだろう。この教育は何の特別なことは起こっていない一般的な教育だろう。ある日、クラスの一人が補聴器を付けてきた果たしてこれは一般的な教室だろうか。ほとんどの人が特別な違和感を感じるだろう。慣れれば普通の教室かもしれないが、それまでは違和感を覚えるだろう。視力が低い人がメガネをするのと、聴力が低い人が補聴器をするだけでここまで差がでてしまう。理由はいくつかあると思う。まずは聴力が低い人が視力が低い人よりも圧倒的に多いからだろう。さらに補聴器がイヤホンと同じようなものだと認識している人がいるからだと思う。2000年頃からブルートゥースと呼ばれるひもの無いイヤホンが普及しているのは大きな理由だと思う。

私は普段補聴器をしていないが、レンタルという形で補聴器を体験したことがある。補聴器をすることによって、聞こえかたはすごく良くなった。数日間ピーピーという雑音が聞こえ、違和感を感じていたが、ある程度日にちが経つと雑音も聞こえにくくなり、ずっとしていたいと思うほどだった。ある時、補聴器をしながら自転車に乗っていた。自転車に乗る時も、普段は後ろから来るハイブリット車などの音が聞こえにくいため、つねに前と後ろには注意して自転車に乗っていた。しかし、補聴器をすると車が来る音も聞きと

りやすいため安心して自転車に乗っていた。そのころは毎日自転車に乗っていたが、何日かたった時に警察の人に止められた。県内はイヤホンをしてながら自転車に乗ることは禁止ということをその時も知っていたので、イヤホンと勘違いをされていたのだとすぐに理解できた。説明をしたらあっさりと理解してくれたので、一安心していた。その時警察の人は、「ごめんね。」と言ったあと、「こっちも分かりにくいから補聴器を外してくれるかい。」と言われた。その時に自分の頭が真っ白になった。警察の人は軽い気持ちで言ったのだと思う。しかし、その言葉を聞いて私は疑問や怒り、恐怖といったさまざまな感情が一気に湧き上がってきた。私は補聴器とはさまざまな理由で足りなくなった聴力を補い、一般人と同じように生活をするためにあるものだと思っている。これは補聴器だけでなくメガネなどにもあてはまると思っている。それなのにメガネは良くて補聴器はダメだと言われたのだ。後ろのから来る車の存在が分からず、いきなり追いこされる。ことは話を聞くだけではうまく伝わらないが、実際に体験すると言葉では表せない恐さだ。

他にも、電車に乗っている時にイヤホンをしていて、自分が「どいて」と言っているのが聞こえていないと思い、補聴器を引っ張りあげたといったことがニュースに取り上げられていた。このようなことに対し、一般社会法人全日本難聴者・中途失聴者連合会が販売している耳マークというものがある。耳マークとは聞こえにくい、聞こえないということのアピールしたり、そのような人を支援することを示すマークである。しかし、耳マークそのものを聞くのが初めての人も多く、内閣府の調査で耳マークの認知度は十二パーセントという。公共の場での補聴器は受け入れ難い現実がある。

誰もが障がいなど持たずに健康で生きていたい。「誰もが障がいをもって生まれていたいと思っていない。」しかし、障がいを理由にいじめや差別に遭う人は後を絶たない。いじめや差別に遭っている人に、できるならば一般人として普通に生活がしたいと聞いたら、全然そうだと答えるだろう。

私は障がい者だからといって、何ら特別なことではないと思う。自分は障がいを持っているという立場は、そのことを別の視点から伝えられるというアドバンテージがある。私はこれからも障がい者は特別ではないということを伝えていきたい。

